

大学生における心理的居場所感と自己評価感情との関連

橋本有理・谷渕真也

The relationship between in “Ibasho” (one’s psychological place) and self-evaluation affect among university students

Yuri HASHIMOTO and Shinya TANIBUCHI

【要旨】本研究の目的は、大学生における心理的居場所感と自己評価感情との関連を検討することであった。大学生192名に質問紙調査を行った結果、(1)男性では、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所における「精神的安定」の機能が、肯定的な自己評価感情と否定的な自己評価感情の両方を高くすること、(2)女性では、「思考・内省」の機能が、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所では肯定的な自己評価感情を高くするが、一方で、保護者と一緒にいるときの心理的居場所では肯定的な自己評価感情を低くし否定的な自己評価感情を高くすること、(3)友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所における「他者からの自由」の機能は、男性では自分自身の基準と比較して否定的な自己評価感情を低くしていたが、女性では周囲や社会の基準と比較して肯定的な自己評価感情を高くすることが明らかになった。

【キーワード】青年期、心理的居場所感、自己評価感情

問題と目的

「居場所」とは本来、「いるところ、いどころ」(広辞苑第7版, 2018)という物理的な空間を意味している。しかし、文部科学省(1992)が「自己の存在感を実感し精神的に安定してられる場所」を「心の居場所」と定義して以降、「居場所」は心理的な意味をも表すようになってきた。心理的な意味での「居場所」という言葉が注目され始めたのは、不登校の増加が問題視されるようになった1980年代である。1992年には、文部省学校不適応対策調査研究協力者会議が「登校拒否(不登校)問題について一児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して一」を報告し、「心の居場所」の役割を学校が果たすことを求めている。また、大学生を中心とする青年期においても、思春期から成人期への移行過程を支える拠り所としての居場所の存在は重要であるとされている(中藤, 2011)。

中藤(2011)は、これまでの「居場所」研究を、大きく2つのアプローチに分類している。1つ目のアプローチは、居場所をある程度の実体性を持った「場

所」や「空間」として捉え、その構成条件や性質について明らかにしようとする方法である。こうしたアプローチにおいては、多くの個人にとって居場所となるような場とは、いかなる条件・性質を備えた場であるのかについての理解が目指されている。2つ目のアプローチは、居場所における個人の主観的体験について理解しようとする方法である。個人にとってその場が居場所であると感じられる際に、個人がどのような感覚を抱いているのか、どのような体験がそこでなされているのかについての理解が目指されている。本研究では、個人の主観的体験という側面から居場所を理解するため、後者のアプローチにより検討をすすめる。

ところで、主観的体験に着目した「居場所」研究において、「居場所」という言葉の定義は確立しておらず、それに伴ってその測定尺度も研究によってさまざまである。例えば、則定(2008)は、「居場所」の中でも心理的な側面に注目し、「心理的居場所」を「心の拠り所となる関係性、および、安心感があり、ありのままの自分を受容される場」、「心理的居場所があ

るという感情」を「心理的居場所感」と定義した。そして、その定義に則して「本来感」、「被受容感」、「安心感」、「役割感」の4つの下位尺度からなる青年版心理的居場所感尺度を作成した。それに対して石本(2010)は、広く一般的な「居場所」概念はあまりにさまざまな意味をもっているため、それをを用いた検討では教育臨床や心理臨床の領域で有用な貢献ができないとした。そのため、他者との関係に対する意味づけを居場所の心理的条件と限定し、「本来感」と「自己有用感」から居場所感を測定した。一方、杉本・庄司(2006)は、「居場所」を「いつも生活している中で、特にいたいと感じる場所」と広く操作的に定義し、主観的に「いたい場所」と客観的に「いる場所」を「居場所」であるととらえた。居場所に他者の存在があることを限定せず、また、居場所の心理的機能についても出来るだけ多様な側面を測定することを重視した。そのために、「被受容感」、「精神的安定」、「行動の自由」、「思考・内省」、「自己肯定感」、「他者からの自由」の6つの下位尺度からなる「居場所」の心理的機能の尺度を作成した。本研究では、「居場所」における主観的体験をできるだけ幅広くとらえるため、杉本・庄司(2006)の定義と測定方法を採用することとした。

「居場所」における主観的体験については、発達の变化があることが明らかになっている。則定(2008)は、中学生、高校生、大学・専門学校生を対象に青年版心理的居場所感尺度を用いて質問紙調査を行い、重要な他者に対して感じる居場所感の発達の变化を検討している。その結果、発達段階と両親、親友といった対象によって居場所感として強く抱く感情が異なることが明らかになった。具体的には、大学生・専門学校生においては、両親、親友に共通して「安心できる」という感情を持つとともに、両親に対しては「受け入れられている」という感情、親友に対しては「ありのままの自分でいられる」という感情を強く抱いていることが明らかになった。青年期はアイデンティティの確立や心理的離乳の時期であり、その過程で両親と親友が居場所として異なる役割を持っていると考えられる。

また、石本(2010)は、中学生と大学生を対象に質問紙調査を行い、「本来感」、「自己有用感」の2つの居場所感と自己肯定意識および学校適応との関連について検討している。その結果、中学生では、家族に対する居場所感が自己肯定意識や学校適応を高め、友人あるいはクラスに対する居場所感もまた自己肯定意識や学校適応を高めていた。一方、大学生では、家族

に対する居場所感は自己肯定意識にも学校適応にもほとんど影響を与えていなかったが、友人あるいは恋人に対する居場所感が彼らの自己肯定意識を高めることが明らかになった。

杉本・庄司(2006)は、小学生、中学生、高校生を対象に質問紙調査を実施し、「居場所」の心理的機能の発達の变化を検討している。その結果、小学生から大学生へと学校段階が上がるにつれて、「家族のいる居場所」、「家族以外の人のいる居場所」、「自分ひとりの居場所」の順に「居場所」が変化していた。このことから、思春期を迎えた子どもたちは、親からの精神的な自立に伴い、「家族のいる居場所」という1つで「被受容感」、「精神的安定」、「行動の自由」、「思考・内省」、「自己肯定感」、「他者からの自由」というすべての心理的機能を満たしてくれる居場所から離れ、それに代わる「居場所」を求めるようになっていくと指摘している。さらに、谷測(2015)は、「居場所」の心理的機能の尺度(杉本・庄司, 2006)と本来感尺度(石本, 2010)を使用し、大学生を対象に大学内での居場所感と学校適応感の関連を明らかにした。その結果、「精神的安定」、「自己肯定感」の機能と「本来感」が学校適応感を高めるのに対し、「他者からの自由」や「行動の自由」の機能が学校適応感を低くすることを明らかにしている。

以上より、大学生では、友人や恋人との間や大学内での居場所感が自己肯定意識や学校適応感を高めることが明らかになっている。しかし、「他者からの自由」や「行動の自由」といった心理的機能は必ずしも学校適応に肯定的な影響を及ぼすばかりではないことを示す研究もあり、自己肯定意識についても検討する必要がある。また、家族との居場所について心理的機能を検討した研究はみあたらない。そこで、本研究では、家族に対する居場所の心理的機能および友人・恋人に対する居場所の心理的機能と自己肯定意識との関連を検討する。

近年、自己肯定意識など自己評価を「自分自身の基準と比較してどの程度肯定的か」という1次元のみで測定することに批判があがっている。例えば、原田(2015)は、Rosenberg(1965)のSelf-Esteem Scale(自尊感情尺度)について、個人基準の自己評価感情である自尊感情を測定する尺度であるが、質問項目の中に、社会基準で自己をとらえた際の評価感情を尋ねていると考えられる項目が存在していることを指摘している。その上で原田(2015)は、個人の基準に照

らし合わせた上での評価感情と、社会的な基準に照らし合わせた上での評価感情とを区別する必要があるとしている。個人基準の自己評価とは、自分自身の基準と比較して評価することであり、個人が重要視している自己概念の領域に対する評価の影響を受けやすいとされている。社会基準の自己評価とは、他者との比較や社会の基準と照らし合わせて評価することである。たとえば、社会基準で自己を見た際に自分が他者より劣っていると感じていても、個人基準で自己を見た際に自分自身に満足していると感じる場合には、社会基準の自己評価感情は否定的だが個人基準の自己評価感情は肯定的なものになる。一方、社会基準で自己を見た際に自分が他者より優れていると感じても、自己の基準を非常に高く設定しておりその評価基準によって自己を見た際に自分に満足していないと感じる場合には、社会基準の自己評価感情は肯定的だが個人基準の自己評価感情は否定的なものになる(原田, 2015)。また、原田(2015)は、自己評価を測定する際には、自己評価が肯定的でもあり否定的でもある人、自己評価が肯定的でも否定的でもない人の存在も考える必要があり、自己評価感情が“肯定的であること”と“否定的であること”を同一次元上の両極として捉えるのではなく、別次元のものとして区別する必要があるとした。これらの指摘を考慮し、本研究では自己肯定意識の測定の代わりに、原田(2015)の自己評価感情を用いることとする。

方法

調査対象者 中国地方の私立大学の大学生192名(男性95名, 女性90名, その他1名, 不明6名), 平均年齢19.4歳($SD=1.07$)であった。

調査時期・調査方法 集団に質問紙を配布しその場で回答してもらい回収した。調査時期は2018年7月～10月であった。

調査内容 (1) 保護者に対する心理的居場所感「居場所」の心理的機能を測定する尺度(杉本・庄司, 2006)を使用し、保護者(親かそれに近い人)に関する回答を求めた(Table 1)。「被受容感」が“自分を本当に理解してくれる人がいる”, “悩みを聞いてくれる人がいる”, “人と一緒にいられる”など7項目, 「精神的安定」が“満足する”, “無理をしないでいられる”, “本当の自分でいられる”など10項目, 「行動の自由」が“自分の好きなことができる”, “自分の好きなようにできる”, “自由だ”など6項目, 「思考・内省」が“自分のことについてよく考える”, “物思いにふける”, “1日のことを振り返る”など4項目, 「自己肯定感」が“何かに夢中になれる”, “自分の能力を発揮できる”, “好きな物がある”など5項目, 「他者からの自由」が“他人のペースに合わせなくていい”, “人を気にしなくていい”, “人に会わなくていい”の3項目, 計35項目であった。「全然あてはまらない(1点)」から「とてもよくあてはまる(4点)」までの4件法で回答を求めた。今、保護者がいない場

Table 1
「居場所」の心理的機能尺度の項目

被受容感	自分を本当に理解してくれる人がいる 悩みを聞いてくれる人がいる 人と一緒にいられる ひとりじゃない 自分はそのメンバーである 自分は大切にされている 人のために何かができる	行動の自由	自分の好きなことができる 自分の好きなようにできる 自由だ 自分の物がある 自分だけの時間がもてる 寝ることができる
精神的安定	満足する 無理をしないでいられる 本当の自分でいられる 幸せ おもしろい 素直になれる 楽しい 自分らしくいられる 誰にもじゃまされない 安心する	思考・内省	自分のことについてよく考える 物思いにふける 1日のことを振り返る ボーっと考えこむことがある
		自己肯定感	何かに夢中になれる 自分の能力を発揮できる 好きな物がある 自分はずまくやれる 自分に自信がもてる
		他者からの自由	他人のペースに合わせなくていい 人を気にしなくていい 人に会わなくていい

Table 2
自己評価感情尺度の項目

個人基準 - 肯定的自己評価感情	今の自分が好きである 今の自分に、満足している 自分のなかに、好きところがある
個人基準 - 否定的自己評価感情	自分のだめところが気になる 自分のことが嫌いになることがある 自分のなかに、変えたいところがある
社会基準 - 肯定的自己評価感情	自分のなかには、人に自慢できるところがある 自分のなかには、人からうらやましがられるところがある 自分には、人には負けないものがある
社会基準 - 否定的自己評価感情	まわりの人はみな、自分よりすぐれていると思う まわりとくらべると、自分はだめな人間だと思う なにをしても、自分は人にはかなわないと思う

合は、過去に保護者と一緒にいたときを思い出して回答するよう教示した。得点が高いほど、「心理的居場所」の各機能が低いことを示した。

(2) 友人・恋人に対する心理的居場所感 保護者に対する心理的居場所感と同様の35項目を使用し、友人・恋人について回答を求めた。事前に「今、一緒にいることがある友人・恋人」として、最初に思い浮かんだ人物のイニシャルを記入してもらい、その人について回答するよう教示した。また、今、一緒にいることがある友人・恋人がいない場合は、イニシャルの記入はせず、過去に一緒にいたときを思い出して回答するよう教示した。なお、イニシャルの記入がなかったものは分析から除外した。得点が高いほど、「心理的居場所」の各機能が低いことを示した。

(3) 全体的な自己評価感情 全体的な自己評価感情を測定する短縮版自己評価感情尺度（原田，2015）を使用した（Table 2）。「個人基準 - 肯定的自己評価感情」が“今の自分が好きである”，“今の自分に、満足している”，“自分のなかに、好きところがある”の3項目、「個人基準 - 否定的自己評価感情」が“自分のだめところが気になる”，“自分のことが嫌いになることがある”，“自分のなかに、変えたいところがある”の3項目、「社会基準 - 肯定的自己評価感情」が“自分のなかには、人に自慢できるところがある”，“自分のなかには、人からうらやましがられるところがある”，“自分には、人には負けないものがある”の3項目、「社会基準 - 否定的自己評価感情」が“まわりの人はみな、自分よりすぐれていると思う”，“まわりとくらべると、自分はだめな人間だと思う”，“なにを

しても、自分は人にはかなわないと思う”の3項目、計12項目であった。「全然あてはまらない（1点）」から「非常にあてはまる（7点）」までの7件法で回答を求めた。得点が高いほど、肯定的あるいは否定的な自己評価の程度が強いことを示した。

(4) デモグラフィック変数 性別、年齢、学年について回答を求めた。

結果

1. 尺度の信頼性

まず、保護者と一緒にいるときの「居場所」の心理的機能尺度の信頼性を確認するためにCronbachの α 係数を算出した。その結果、「被受容感」は.90、「精神的安定」は.95、「行動の自由」は.90、「思考・内省」は.80、「自己肯定感」は.88、「他者からの自由」は.78であり、十分な内的整合性が確認された。

次に、友人・恋人と一緒にいるときの「居場所」の心理的機能尺度の信頼性を確認するためにCronbachの α 係数を算出した。その結果、「被受容感」は.92、「精神的安定」は.95、「行動の自由」は.88、「思考・内省」は.82、「自己肯定感」は.88、「他者からの自由」は.72であり、十分な内的整合性が確認された。

最後に、短縮版自己評価感情尺度の信頼性を確認するためにCronbachの α 係数を算出した。その結果、「個人基準 - 肯定的自己評価感情」は.86、「個人基準 - 否定的自己評価感情」は.82、「社会基準 - 肯定的自己評価感情」は.87、「社会基準 - 否定的自己評価感情」は.84であり、十分な内的整合性が確認された。

Table 3
保護者と一緒にいるときの心理的居場所感の各尺度得点

	全体			男性			女性			t 値
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	
被受容感	191	3.06	0.62	94	2.89	0.62	90	3.25	0.57	-4.10***
精神的安定	189	3.01	0.67	93	2.82	0.65	89	3.23	0.63	-4.33***
行動の自由	190	2.73	0.68	94	2.55	0.71	89	2.92	0.62	-2.78**
思考・内省	192	3.06	0.67	95	2.94	0.68	90	3.21	0.64	-3.73***
自己肯定感	192	2.86	0.68	95	2.73	0.68	90	3.01	0.66	-2.78**
他者からの自由	190	2.81	0.73	93	2.61	0.66	90	3.02	0.76	-3.88***

*** $p < .001$, ** $p < .01$

Table 4
友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所感の各尺度得点

	全体			男性			女性			t 値
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	
被受容感	189	3.18	0.61	93	3.09	0.65	90	3.26	0.56	-1.95
精神的安定	190	3.19	0.60	94	3.09	0.62	90	3.28	0.57	-2.13*
行動の自由	188	3.08	0.61	92	3.04	0.63	90	3.14	0.58	-1.14
思考・内省	188	2.78	0.68	93	2.70	0.73	89	2.86	0.64	-1.55
自己肯定感	189	3.03	0.62	93	3.02	0.62	90	3.04	0.62	-0.27
他者からの自由	189	2.81	0.69	93	2.75	0.70	90	2.86	0.67	-1.16

* $p < .05$

Table 5
自己評価感情の各尺度得点

	全体			男性			女性			t 値
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	
個人基準・肯定	190	4.20	1.38	94	4.47	1.33	90	3.93	1.41	2.65**
個人基準・否定	190	5.43	1.19	94	5.02	1.28	90	5.87	0.90	-5.23***
社会基準・肯定	189	4.24	1.39	94	4.53	1.36	89	3.94	1.39	2.91**
社会基準・否定	189	4.73	1.30	93	4.35	1.34	90	5.12	1.16	-4.14***

*** $p < .001$, ** $p < .01$

2. 性別による各尺度得点の差

全体、男性、女性における各尺度得点を算出した。また、「居場所」の心理的機能尺度の下位尺度と短縮版自己評価感情尺度の下位尺度について性別による平均値の差を検定した。その結果、保護者と一緒にいるときの心理的居場所では、「被受容感」($t(182) = -4.10, p < .001$)、「精神的安定」($t(180) = -4.33, p < .001$)、「行動の自由」($t(183) = -2.78, p < .01$)、「思考・内省」($t(181) = -3.73, p < .001$)、「自己肯定感」($t(183) = -2.78, p < .01$)、「他者からの自由」($t(175) = -3.88, p < .001$)のすべての下位尺度において女性の方が男性より有意に得点が高かった (Table 3)。友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所では、「精神的安定」($t(182) = -2.13, p < .05$)において女性の方が男性より有意に得点が高かった (Table 4)。また、自己評価感情では、「個人基準・肯定的自己評価感情」($t(182) = 2.65, p < .01$)、「個人基準・否定的自己評価感情」($t(167) = 5.23, p < .001$)、「社会基準・肯定的自己評価感情」($t(181) = 2.91, p <$

.01)、「社会基準・否定的自己評価感情」($t(181) = -4.14, p < .001$)のすべての下位尺度において有意な差がみられた (Table 5)。「個人基準・肯定的自己評価感情」と「社会基準・肯定的自己評価感情」において男性の方が女性より有意に得点が高く、「個人基準・否定的自己評価感情」と「社会基準・否定的自己評価感情」において女性の方が男性より有意に得点が高かった。

3. 心理的居場所感が自己評価感情に与える影響

保護者および友人・恋人と一緒にいるときの「居場所」の心理的機能の各下位尺度得点を独立変数、自己評価感情の各下位尺度得点を従属変数とした重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った。その際、本研究の男女別の各尺度得点において性差がみられたことから、男女に分けて分析を行った (Table 6)。その結果、男性では、「個人基準・肯定的自己評価感情」に影響を与えている変数は、保護者と一緒にいるときの心理的居場所における「被受容感」の機能、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所における「精神的

Table 6
自己評価感情を従属変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）

		個人基準				社会基準			
		肯定		否定		肯定		否定	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
保護者	被受容感	.39**							
	精神的安定								
	行動の自由								
	思考・内省	-.40***							
	自己肯定感	.67***				.42***			
友人・恋人	他者からの自由	-.58***							
	被受容感								
	精神的安定	.32**		.43**		.53***		.42**	
	行動の自由								
	思考・内省	.43***				.42**			
調整済みR ² 値	自己肯定感			-.30*		-.28*			
	他者からの自由								
F値		.40	.54	.09	.27	.30	.11	.22	.22
		25.79***	31.94***	4.69*	29.25***	11.87***	5.54**	12.32***	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

空欄は除外された独立変数

安定」の機能であった。「社会基準 - 肯定的自己評価感情」に影響を与えている変数は、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所における「被受容感」の機能であった。「個人基準 - 否定的自己評価感情」と「社会基準 - 否定的自己評価感情」の調整済みR²値はそれぞれ.09, .11と低かった。

一方、女性では、「個人基準 - 肯定的自己評価感情」に影響を与えている変数は、保護者と一緒にいるときの心理的居場所における「思考・内省」、「自己肯定感」の機能、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所における「思考・内省」の機能であった。「個人基準 - 否定的自己評価感情」に影響を与えている変数はみられなかった。「社会基準 - 肯定的自己評価感情」に影響を与えている変数は、保護者と一緒にいるときの心理的居場所における「自己肯定感」の機能、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所における「被受容感」、「他者からの自由」の機能であった。「社会基準 - 否定的自己評価感情」に影響を与えている変数は、保護者と一緒にいるときの心理的居場所における「思考・内省」、「自己肯定感」の機能であった。

考 察

本研究の目的は、大学生における心理的居場所感と自己評価感情との関連を保護者および友人・恋人との関係において検討することであった。

1. 心理的居場所感の性差

本研究では、保護者と一緒にいるときの心理的居場所において「被受容感」、「精神的安定」、「行動の自

由」、「思考・内省」、「自己肯定感」、「他者からの自由」のすべての下位尺度で女性の方が男性より有意に得点が高かった。また、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所において「精神的安定」のみ女性の方が男性より有意に得点が高かった。大学生を対象にした自由記述により「居場所」の分類を行った豊田・岡村（2001）は、男性が“自分”や“家にいる時”を「居場所」とすることが多いのに対し、女性は、“他者といる時”や“父・母・祖父母”を「居場所」とすることが多いことを明らかにしている。このことから、本研究の女性も、他者といるときにおいて心理的居場所感を強く感じていることが考えられる。

また、小学生、中学生、高校生を対象に「自分ひとりの居場所」、「家族のいる居場所」、「家族以外の人のいる居場所」の分類によって「居場所」の心理的機能を検討した杉本・庄司（2006）では、学校段階や居場所の分類に関係なく、「被受容感」は女性の方が有意に得点が高く、「自己肯定感」は男性の方が有意に得点が高いことを明らかにした。これは本研究の大学生における結果とは異なり、本研究の結果は、大学生の発達段階に特有の特徴であると考えられる。本研究の対象者の平均年齢は19.4歳で、主に大学1年生と2年生であった。大学1年生は、入学したてで親しい友人は少なく自分とのつながりが感じられる人物は身近な存在である家族や母親であるという（近江, 2004）。父親や母親とのつながりが重要であるため、対人依存欲求の高い女性において、より両親との関係における居場所の機能が強くなったと考えられる。

2. 自己評価感情の性差

自己評価感情について、「個人基準 - 肯定的自己評価感情」、「社会基準 - 肯定的自己評価感情」では男性の方が女性より得点が有意に高かった。また、「個人基準 - 否定的自己評価感情」、「社会基準 - 否定的自己評価感情」では女性の方が男性より得点が有意に高かった。すなわち、男性では、自分自身の基準との比較や、他者との比較や社会の基準との比較において肯定的な自己評価を行うのに対し、女性では、自分自身の基準との比較や、他者との比較や社会の基準との比較において否定的な自己評価を行うことが明らかになった。原田ら（2018）は、小学校高学年と中学生を対象とした調査において、男子の方が女子より肯定的な自己評価感情が高く、否定的な自己評価感情が低いことを明らかにしている。本研究の結果から、大学生の自己評価感情においても、小学校高学年および中学生でみられたのと同様の性差がみられることが明らかになった。

3. 心理的居場所感と自己評価感情の関連

調整済み R^2 値が.20以上であったものについて考察する。

まず、心理的居場所感と自己評価感情との関連について、居場所感のうちの「本来感」および「自己有用感」と個人の肯定的自己評価である自己肯定意識との関連を検討した石本（2010）との比較を行った。男性では、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所における「精神的安定」の機能が、個人基準の肯定的自己評価と個人基準の否定的自己評価に正の影響を与えていた。すなわち、男性においては、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所が無理をしない本当の自分でいられる、また、それによって引き起こされる良い精神状態を感じることができると、自分自身の基準と比較して肯定的な自己評価を行う、また、否定的な自己評価を行うことが明らかになった。石本（2010）と本研究の居場所感の項目を比較したところ、石本（2010）における「本来感」は“これが自分だ、と実感できるものがある”、“いつでも自分らしくいられる”、“ありのままの自分が出せる”などの項目で構成されており、本研究で使用した「居場所」の心理的機能尺度の「精神的安定」に属する“本当の自分でいられる”、“素直になれる”、“自分らしくいられる”という項目と類似していた。そのため、本研究の結果は、石本（2010）の大学生の男性における友人本来感が肯定的な自己評価に影響を与えると

いう結果を支持するといえる。一方、「精神的安定」が個人基準の否定的自己評価にも正の影響を与えていたことについては、「個人基準 - 否定的自己評価感情」の項目内容が関係していると考えられる。「個人基準 - 否定的自己評価感情」は“自分のだめなところが気になる”、“自分のことが嫌いになることがある”、“自分のなかに、変えたいところがある”のように自分の一部分を否定的に評価する項目で構成されている。友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所が「精神的安定」の機能を強く持つ場合、自分の肯定的な面も否定的な面もその場所において表出することができ、その結果、自分自身の基準と比較して否定的な自己評価が高まる可能性がある。また、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所における「精神的安定」の機能が、社会基準の否定的自己評価に負の影響を与えていた。すなわち、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所で「精神的安定」の機能を感じることができると、他者との比較や社会の基準と照らし合わせて否定的な自己評価を行いにくいことが明らかになった。石本（2010）では、男性における友人本来感が自己肯定意識と強い関連があるとされていたが、本研究では自己評価をより幅広く測定した結果、心理的居場所感が「個人基準 - 肯定的自己評価感情」、「個人基準 - 否定的自己評価感情」、「社会基準 - 否定的自己評価感情」の3つの側面にそれぞれ関連することが明らかになった。

一方、女性の「個人基準 - 肯定的自己評価感情」について保護者と一緒にいるときの心理的居場所における「思考・内省」の機能が負の関連、「自己肯定感」の機能が正の関連、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所における「思考・内省」の機能が正の関連を示した。一方、石本（2010）では、「本来感」と「自己有用感」で有意な正の関連が示されていた。項目内容を比較すると石本（2010）の「本来感」と「自己有用感」（“関心をもたれている”、“自分が必要とされていると感じる”、“自分の存在が認められていると感じる”など）はそれぞれ本研究の「精神的安定」と「被受容感」に類似する変数である。本研究では、「思考・内省」や「自己肯定感」といった幅広い心理的居場所感を測定して、「個人基準 - 肯定的自己評価感情」とより強く関連する変数が明らかになった。

男性では、「被受容感」の機能を除いて保護者と一緒にいるときの心理的居場所感は自己評価感情に影響を与えておらず、友人・恋人と一緒にいるときの心理

的居場所感が自己評価感情に多く影響を与えていた。一方、女性では、保護者と一緒にいるときの心理的居場所における「思考・内省」、「自己肯定感」の機能が、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所における「被受容感」、「思考・内省」、「他者からの自由」の機能が自己評価感情に影響を与えていた。すなわち、男性では友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所感が、女性では保護者と一緒にいるとき、友人・恋人と一緒にいるときの両方の心理的居場所感が自己評価感情に影響を与えていることが明らかになった。中学生、高校生、大学生を対象に独立意識の発達的变化と性差について検討した加藤・高木（1980）によれば、女性は、学校段階が上がるにつれて親への依存性が高くなり、女子大学生における親への依存性は心理的安定と関係しているという。これらのことは、女性では大学生の発達段階においても保護者と一緒にいるときの心理的居場所感が心理的適応において重要な位置を占めていることを示すものである。

女性において、保護者と一緒にいるときの心理的居場所における「思考・内省」の機能が「個人基準・肯定的自己評価」に負の影響を、「社会基準・否定的自己評価感情」に正の影響を与えていた。すなわち、保護者と一緒にいるときに「考えたり、思考したりすることができる」と感じるほど、自分自身の基準と比較して肯定的な自己評価を行いにくい、また、他者との比較や社会の基準と比較して否定的な自己評価を行うことが明らかになった。一方、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所における「思考・内省」の機能が低いほど、自分自身の基準と比較して肯定的な自己評価を行いやすいことが示された。谷渕（2015）では、男女込みの分析の結果、大学内の居場所における「思考・内省」の機能が学校適応にネガティブな影響を及ぼすことが指摘されている。しかし、自己評価感情においては、保護者と一緒にいるときの心理的居場所における「思考・内省」の機能はネガティブな関連を、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所における「思考・内省」の機能はポジティブな関連を及ぼすことが明らかになった。心理的居場所感は学校適応と自己評価感情にそれぞれ違った関連をもつ可能性が示唆された。本研究では、保護者と一緒にいるとき、友人・恋人と一緒にいるときにそれぞれどのような内容を「思考・内省」しているのかは検討していない。今後は、「思考・内省」の関連の方向性が、一緒にいる相手によって異なるのか、その時に考えている内容に

よるのかを検討する必要があると考えられる。

保護者と一緒にいるときの心理的居場所感における「自己肯定感」の機能が「個人基準・肯定的自己評価感情」に正の影響を、「社会基準・肯定的自己評価感情」に正の影響を、「社会基準・否定的自己評価感情」に負の影響を与えており、保護者と一緒にいるときに「自分に自信が持てる」と感じるほど、自分自身の基準や、他者との比較、社会の基準と照らし合わせて肯定的な自己評価を行い、また、他者との比較や社会の基準と照らし合わせて否定的な自己評価を行いにくいといえる。これは、女子大学生における親の存在の重要性（加藤・高木、1980）を支持する結果であった。

また、女性において「社会基準・肯定的自己評価感情」に影響を与えていた変数は、保護者と一緒にいるときの心理的居場所における「自己肯定感」の機能と、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所における「被受容感」、「他者からの自由」の機能であり、多様な心理的居場所感が「社会基準・肯定的自己評価感情」に影響を与えていることがわかった。なかでも、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所における「他者からの自由」の機能は「社会基準・肯定的自己評価感情」に負の影響を与えており、「他人を気にせずにいられる」と感じることで、他者との比較や社会の基準と照らし合わせて肯定的な自己評価を行いにくいことが明らかになった。大学生を対象に依存欲求と自己信頼感・他者信頼感の関連について検討した竹澤・小玉（2004）は、自分が困っているときや悩んでいるときに他者と接触することによって情緒的な安心感を得たいという「情緒的依存欲求」と何らかの課題達成のために他者から具体的な助言や援助を得ることによって課題達成の一助としたいという「道具的依存欲求」は、女性の方が男性より有意に得点が高いことを明らかにした。また、女性において情緒的依存欲求が高い人は自己への信頼感や他者への信頼感が高いこと、道具的依存欲求が高い人は他者への信頼感が高いことを明らかにした。一方、男性において依存欲求と信頼感との間には関連がほとんどみられなかったことを示した。竹澤・小玉（2004）は、情緒的欲求は他者との情緒的つながりを求めるものであり、情緒的つながりを感じるためには、人に受け入れられているという感覚が重要である。人に受け入れられるためには、自分が受け入れられるだけの価値があるという感覚である「自己信頼感」と人は自分を受け入れてくれるという感覚である「他者信頼感」が大切

だと示唆した。これらのことから、対人依存欲求が高いとされている女性は、他者との情緒的なつながりを求めることにより、自分が人に受け入れられているという感覚をもつことができ、自分を肯定的に評価できることが考えられる。そのため、女性にとっては自由を感じないことが重要であるといえる。

一方、男性において、友人・恋人と一緒にいるときの心理的居場所における「他者からの自由」の機能は、「個人基準 - 否定的自己評価感情」に負の影響を与えており、友人・恋人と一緒にいるときに「他人を気にせずにいられる」と感じることができると、自分自身の基準と比較して否定的な自己評価を行いにくいことが明らかになった。大学生が「居場所」における他者の役割をどのように認知しているかについて、豊田・岡村（2001）は、“他者の干渉がない”，“他者に気を遣わずにすむ”というように他者からの目を意識しなくてよいとする者と“1人じゃないから”というように他者に依存する者がいることを明らかにしている。男性では、他者からの目を意識せず、自由に振る舞えると感じることによって否定的な自己評価を行いにくくなるのが考えられる。

最後に、自尊心を肯定・否定の2次元で捉えた福留（2018）は、肯定の高さは自己愛と関連し不適応的な側面をあわせ持つのに対し、否定の低さはストレス反応を小さくし、より適応的な側面を持つことを明らかにしており、「否定的自己像の拒否」の方が「肯定的自己像の受容」よりも適切な自己評価であるとした。本研究において、自己評価感情の肯定と否定の両側面の頻度が高まること、あるいは低まるのが個人の適応にどのような影響を与えるかについてはさらに検討する必要がある。

本研究では、心理的居場所感を「被受容感」、「精神的安定」、「行動の自由」、「思考・内省」、「自己肯定感」、「他者からの自由」の6つの側面から測定したことにより、幅広い心理的居場所の機能について検討することができた。また、自己評価感情を肯定・否定、個人基準・社会基準の2次元で測定したため、全体的な自己評価をより詳細に検討することができた。心理的居場所感と自己評価感情の関連については性差が確認され、大学生において自己評価感情に影響を与える心理的居場所の機能は性別によって異なることが明らかになった。

引用文献

原田 宗忠 (2015). 短縮版自己評価感情尺度の作成 愛

知教育大学教育臨床総合センター紀要, 5, 1-10.

原田 宗忠・中井 大介・黒川 雅幸 (2018). 前青年期における自己概念と自己評価感情の揺れおよび高さとの関連 愛知教育大学研究報告. 教育科学編, 67 (1), 49-57.

福留 広大 (2018). ローゼンバーグ自尊感情尺度の2因子: 教育への示唆 広島大学大学院教育学研究科博士論文 Retrieved from https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/4/46105/20180713111937877420/k7521_1.pdf (2019年4月15日)

石本 雄真 (2010). 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21 (3), 278-286.

加藤 隆勝・高木 秀明 (1980). 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28 (4), 336-340.

文部科学省初等中等教育局 学校適応対策調査研究協力者会議 (1992). 登校拒否(不登校)問題について一児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して一文部科学省 Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/06042105/001/001.htm (2018年12月12日)

中藤 信哉 (2011). 青年期における居場所についての研究 京都大学大学院教育学研究科紀要, 57, 153-165.

新村 出 (編) (2018). 広辞苑第7版 岩波書店

則定 百合子 (2008). 青年期における心理的居場所感の発達の变化 カウンセリング研究, 41 (1), 64-72.

近江 則子・田名場 美雪・田名場 忍 (2004). 大学生の被受容感・被拒絶感に関する探索的検討 弘前大学保健管理概要, 25, 12-19.

Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.

杉本 希映・庄司 一子 (2006). 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化 教育心理学研究, 54 (3), 289-299.

竹澤 みどり・小玉 正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, 52 (3), 310-319.

谷潤 真也 (2015). 大学生の居場所感と学校適応感の関連 比治山大学大学院現代文化研究科附属心理相談センター紀要, 22, 65-73.

豊田 弘司・岡村 李光 (2001). 大学生における『居場所』 奈良教育大学教育研究所紀要, 37, 37-42.